＜第 10 回　三曲歌ざんまい＞　―夜の部―

2008 年 11 月 23 日

紀尾井小ホール

曲目解説

「霧海篪」

曲名にある「篪」（チ）は，狭義には古代中国の横笛を指しますが，単に笛（尺八も含めて）と考えてもいいでしょう．なお，俗字として「篪」（コ，大竹の意）を使うこともあるようです．

さて，「霧海篪」（ムカイジ）は，虚竹禅師の作と言われています．虚竹禅師は法燈国師の法弟で，日本の普化宗（虚無僧の宗派）の開祖とも言われます．その虚竹禅師が，伊勢の朝熊山（金剛證寺）にて参籠修行中，霧の海から笛の妙音が聞こえて来るという霊夢を見ました．その夢に感じてこの「霧海篪」と，もう一曲「虚空」とを作曲しました．どちらの曲名も，名付けたのは法燈国師です．これらが事実であれば，1200年代後半の作曲ということになります．また，この2曲に「虚鈴」（昨年の三曲歌ざんまいにて合奏演奏しました）を加えた古伝三曲は，虚無僧の根源の曲とされています．

虚無僧の吹く尺八は，本来は修行のためのもの（吹禅と言います）で，通常は独奏されます．しかし，長い伝承の中で培われたその旋律の美しさは，独奏とは異なる方法でさらに豊かに表現することが出来るのではないでしょうか．昨年の「虚鈴」に続いて，今回は「霧海篪」の合奏用編曲を試みました．なお，古来，曲の伝承に楽譜は用いられませんでしたから，伝承の経緯によって大小様々な異なりが存在します．ここでは，浜松の虚無僧寺「普大寺」の伝承に基づいています．

編曲に当たっては，曲本来の要素を一つも失わないままで，内包する力をできる限り拡大することを目指しています．今回の「霧海篪」は，ソロと合奏という形に仕立ててみました．ソロは霧の中を響いてくる笛（つまり「篪」）の音を，合奏は，その笛の音を包んで，時には共に響き，時には隠し，また時には混ざり合って笛の音そのものにもなってしまい，そしてやがて消えて行く，「霧」を，各々イメージしています．

合奏には，できるだけ多様な尺八の使用を試みました．今回は，筒音Dの1尺8寸管（標準の尺八）から，筒音Gの2尺7寸管までの4種類を用い，4パートとしました．

合奏は，もちろん和音を構成します．しかし，いわゆる西洋音楽の長短三和音は日本音階には必ずしも相応しくありません．そこで，曲の音組織の構造に注目し，それに基づいた和音を構成してみました．従って，西洋音楽の機能和声には従っていません．それどころか，禁則である「並行五度」なども特に避けることはせず，逆にこれを積極的に用いて，転調や主旋律パートの入れ替えなどの効果を得ています．

尺八は，多くの西洋楽器とは比較にならないほどピッチの自由度の大きい作音楽器です．そのため合奏にあたっては，いかにピッチを揃え，和音を響かせるかという点が課題となります．多様な尺八を用いたのは，主要な音程を構成する音に幹音を割り当てるためでもあります．ピッチの不安定さがこれで回避できるわけではありませんが，一方で，西洋楽器には無い音色の豊かさが，それをどれほどか補ってくれるのではないか（そして，さらに余りあれば）と考えています．

（坪井應龍）